

インドとチベットの密教における実践と美術

森 雅秀

1. はじめに

密教をそれ以前の仏教から際立たせるものに、その儀礼重視の立場をあげることができる。祭式至上主義をとるバラモン教に対抗して登場した仏教は、悟りに至るための瞑想や禪定のような個人的な実践を除いては、集団的な儀礼や儀式に対して否定的な立場をとった。受戒のような加入儀礼は、僧団が設立された当初から行なわれていたが、そこでは比丘や比丘尼として不適格なものを排除することを主たる目的とし、形式化された行為自体には積極的な意味を与えていない。

これに対し、しばしば密教は儀礼と結びつけて語られてきた。わが国でも加持祈祷は密教の専有物であったし、護摩をはじめとするさまざまな修法は、密教伝来以来、今日に至るまで連綿と実践されてきた。そして、儀礼や儀式を「事相」と総称し、教理や思想を意味する「教相」と対等の位置にまで引き上げ、両者を車の両輪、鳥の両翼と呼びならわした。

図像も密教においては重要な位置を占める。インドでは密教の時代になると、仏、菩薩などの尊格の種類は爆発的に増加する。大乘仏教の時代までに信仰されてきた主要な尊格たちはそのまま密教徒によって受け継がれ、さらに、女尊や明王のようなそれまでの仏教では考えられなかったようなグループの仏たちも次々に生み出された。ヒンドゥー教の神々に起源を持つ諸天や、龍王、夜叉、星宿や天体の神々などもこれに加わる。

これらの仏や神々は全体が壮大なパンテオンを形成し、各尊のヒエラルキーや機能に従って、その内部も秩序化されていった。そして、この諸尊の体系を統轄する存在として法身や本初仏のような超越的かつ根源的な尊格も登場するに至る。

密教はその流行した地域において、数多くの美術作品を生み出した。インドの美術史上でも、ポスト・グプタ期からパーラ朝期にかけて密教美術が隆盛をほこる。この時代にはおびただしい数と種類の尊像彫刻が制作され、また多くは散佚したと考えられるが、絵画も描かれた。

インドにおいて13世紀の初頭に仏教が滅んだ後、その伝統はチベットやネパールにおいて受け継がれる。これらの地で密教美術は独自の展開を示す。東南アジアや中国においても密教は美術史上に芳醇な成果をもたらした。空海をはじめとする入唐僧や、中国からの渡来僧たちによってもたらされた密教の文化が、わが国の美術史上に多大な影響を与えたことは言うまでもない。

密教の仏たちの姿を規則的に整然と並べ、全体を幾何学的な図形にあてはめたマンダラは、代表的な密教美術と考えられている。わが国でも、金剛界と胎蔵のいわゆる両部のマンダラは、密教美術を語るときにまずはじめにあげられるであろう。近年、研究の進展の著しいチベットの美術も、マンダラに対する関心がその中心を占めている。

インドにおいてもマンダラが制作されたことは、当時の經典や儀軌などの諸文献から確認できる。日本やチベットなどに伝わるマンダラの起源がインドにあることも、これらの文献から明らかである。しかし、現在のインドにはマンダラの作品はひとつとして残されていない。同時代の彫刻や絵画のような芸術作品が相当数伝えられる中で、その粹とも呼ぶべきマンダラは、一点として伝えられていないのである。これは当時のマンダラが単なる礼拝や鑑賞、あるいは装飾のような目的で作られたのではなく、儀礼のためにその「装置」として制作されたことによる。そして、儀式の最後の段階にはマンダラを破壊することも、厳格に定められていた。インドにマンダラが残されていないのはこのためである。

さらにマンダラは瞑想の対象でもあった。密教においては特定の尊格を対象とした独自の実践法がある。自己の現前に尊格を生み出し、これとの神秘的合一体験をめざす瞑想法で、成就法や観想法という名で呼ばれた。密教の尊像作品の中には、このような瞑想法のためのいわば情報源として用いられたものもあったであろう。マンダラも同様に実践のための補助的な役割を果たしたと考えられる。行者はマンダラの中尊と自己との同一性を悟るとともに、中尊の周囲に広がる仏たちの世界、すなわち大宇宙と、自己という小宇宙との本質的な同一性を獲得することをめざしたのである。

この小論ではインドとチベットの密教における宗教実践と美術の関わりについて、従来の研究成果を概略的に示そう。マンダラ、成就法と美術、チベット絵画という三つの項目について、順に述べることにする。

2. マンダラ

わが国におけるマンダラの研究は、次の五つの時代に区分することができる。

- (1) 黎明期 (1955 年ごろまで)
- (2) 図録出版の時代 (1955 年～1975 年ごろ)
- (3) 海外からの衝撃 (1975 年～1985 年ごろ)
- (4) 統合と解釈の時代 (1985 年～1995 年ごろ)
- (5) 新しい時代 (1995 年ごろ～)

黎明期と名付けたのは、近代的な学問としてのマンダラ研究の黎明期であり、伝統的な立場の人々から見れば、マンダラについての解釈はすでに空海やその後継者たちによって完成していたと考えるであろう。それはともかく、マンダラの研究は伝統的な密教学の一分野としてはじまった。1920 年代に出た梅尾祥雲『曼荼羅之研究』(1927) は、わが国のマンダラ研究における記念碑的な業績である。サンスクリットや漢訳資料のみならず、当時としては貴重なチベット語文献を駆使して、とくに胎藏と金剛界の両部マンダラの組織と教理背景が解きあかされている。実際のマンダラの作例も、国内の作品だけではなく、東南アジアやインド、さらにはチベットにまで目を向けている。梅尾氏の著作によってマンダラの研究が学問のひとつの分野として、このときはじめて確立されたと言ってよいであろう。本書は『理趣経の研究』や『秘密事相の研究』とならぶ梅尾氏の主著のひとつであるが、70 年の歳月を経て今なお価値を失っていないことには驚かされる。しかし、梅

尾氏の著作があまりに時代を先取りしすぎていたためか、その後、1960 年ごろまではマンダラに関する本格的な研究書は現れない。

第二期は日本美術の研究者によるマンダラ研究が隆盛を迎えた時代である。戦後の混乱期を経て高度成長の時代にさしかかると、仏像や仏画などの文化財の価値を見直そうとする気運が高まってくる。その一方で出版技術の進歩から大型の美術書や図録がやつぎばやに出版されるようになる。高野山や東寺をはじめとする真言宗の古刹に伝わるマンダラも、カラー図版で一般の人にも知られるようになった。わが国最古のマンダラである高雄曼荼羅の総合的な研究書が、大規模な複製写真とともに出版されたのも 1960 年代後半である（高田他 1967）。少し時代が下るが、1977 年刊行の『教王護国寺蔵 真言院両界曼荼羅』は当時としては破格の豪華本であるが、学者や好事家だけではなく、画家やデザイナーなどそれまでマンダラとは無縁の人々にまでその存在と価値を知らせることに大きく貢献した。そのような時代の中で、美術史的な立場からの両部マンダラに関する総合的な研究書である石田尚豊『曼荼羅の研究』が刊行された（1975）。マンダラにふくまれる一尊一尊の尊容と文献の記述を手がかりに、インドから日本にいたるまでのマンダラの形成と変遷をたどった労作で、わが国におけるマンダラ研究の名著のひとつである。

海外に遺されていたマンダラがつぎつぎと紹介されるようになったのは、1975 年ごろからである。とくにラダックを中心としたチベットのマンダラは、わが国の仏教学者や美術史家たちに大きな衝撃を与えた。パキスタンや中国との国境に近いラダック地方は、それまで政治的な理由から外国人の入国がインド政府によって禁止されていた。1974 年 7 月の開放とともに各国から研究者がおしよせ、アルチ寺をはじめとするチベット仏教寺院の中に極彩色のマンダラを見いだしたのである。荒涼とした不毛の地に広げられるエキゾチックなマンダラ世界というイメージは、未開の地という従来のチベットのイメージにかわり、一般の人々の間にも広く浸透していった。その後、ラダックのマンダラの紹介書や写真集、研究書はつぎつぎと出版され、その勢いは現在でもおとろえていない。代表的なものに井上他（1978）、加藤・松長（1981）、岩宮（1987）、Snellgrove & Skorupski（1977, 1980）、Goepper & Poncar（1996）などをあげることができる。

1983 年に刊行されたサキャ派の名刹ゴル寺のマンダラ集（bSod mams rgya mtsho 1983）には、139 種という膨大な数のマンダラがふくまれ、この書がインドやチベットのマンダラ研究に果たした貢献ははかりしれない。また最近ではラダックのようなチベット全体から見れば辺境の地から、ギャンツェやサキャ、あるいはラサなどの中央チベットの大寺院へと関心は移りつつある（たとえば立川・正木編 1997）。その一方でピヤンやトンガのように、チベットのなかでも西の果ての地に大規模な石窟寺院が発見されている（頼富監修 1997）。

チベットに比べて地味ではあるが、ネパールや東南アジアのマンダラがわが国に紹介されるようになったのもほぼ同じ時期である。また、マンダラの遺品がないと言われたインドからも、マンダラ的な構成をとる作品や、胎蔵マンダラと直接結びつきをもつ作品が 1980 年代に入ってあらたに発見されたことも、マンダラ研究にとって重要な出来事である（佐和編 1982）。

それまで知られていなかったアジア各地のマンダラを前にして、伝統的な立場からこれらを解釈するのはほとんど不可能であった。日本のマンダラもふくめ、これらのマンダラ

全体を咀嚼し、統合的な解釈が現れるのは、ようやく 1980 年代になってからである。代表的な文献に松長有慶『密教 コスモスとマンダラ』(1985)、立川武蔵『曼荼羅の神々』(1987)、頼富本宏『密教とマンダラ』(1990)などをあげることができよう。いずれもインド、チベット、ネパールなどの海外のマンダラを直接調査し、紹介につとめた研究者たちである。ここにいたってはじめて「マンダラとは何であるか」が、伝統的な用語を用いずに、平易な言葉で語られるようになった。トゥッチの『マンダラの理論と実践』の邦訳が入手しやすい形で刊行されたのもこの時期である(1984)。さらに、同書は多数の図版と詳細な訳注とともに、別の出版社からも刊行された(1991)。かなり高度な内容の専門書としては異例の扱いであろう。密教ブーム、マンダラブームのなかで啓蒙的な書物が数多く現れたが、その一方で田中公明『曼荼羅イコノロジー』(1987)のような、日本とチベットのマンダラを対象とした総合的な研究書が現れたことも見逃してはならない。田中氏はその後も着実にマンダラやチベットの密教美術に関する著作を精力的に発表している(1990, 1993, 1996 etc.)。

マンダラの研究も 1990 年代になって一種の安定期にはいり、学際化と専門化というふたつの極に分化しつつあるようである。はじめの方向である学際化として、仏教学や美術史家だけではなく、人類学や考古学、宗教学、哲学、心理学など他の分野の研究者との共同作業としてマンダラ研究が進められる(たとえば立川編 1993, 1996)。学際化と平行して、インドの他の宗教がもつマンダラ的な宗教図像やデザインとの比較という「汎インド化」とでも呼ぶべき動向も一部に見られる。これらの動きとならんで、逆に研究の細分化も進められている。ひとつひとつのマンダラを取り上げ、経典や注釈書などの文献との関係や成立過程の解明、あるいは図像的なデータの集積がはかられるであろう。また、チベットなどに残る代表的な遺品に、わが国のマンダラに対して行ったような綿密な考証も試みられると考えられる。筆者が発表したギャンツェのペンコル・チューデ仏塔のマンダラの壁画の研究(1997a)や、サキャ派の名刹ゴル寺で15世紀初頭に制作されたマンダラのセットに関する研究(1998)は、このような研究の細分化の流れの中に位置づけられる。

すでに述べたように、インドの仏教徒たちはマンダラをヨーガや瞑想のためだけで用いたのではなく、集団的な儀礼行為、すなわち儀式のためにもマンダラを使用した。これまでのマンダラ研究は、この儀式や儀礼とマンダラとの関係という視点が抜け落ちていたように感じられる。筆者が 1997 年に上梓した『マンダラと密教儀礼』は、これまでのマンダラ研究においてあまり関心が払われなかったこの儀礼とマンダラの関係について、はじめて本格的に考察したものである。インド後期密教の文献を利用して、マンダラを制作する儀礼と、マンダラを用いて行われる灌頂について詳しく紹介した。とくに儀礼や実践におけるマンダラの機能やシンボリズム、表現上の特徴との関係などを解明するようつとめた。

3. 成就法と美術

成就法や観想法と呼ばれるインド密教独自の行法については、その方法を解説する同時代の文献から知ることができる。とくに12世紀にインドにおいて集成された成就法文献

『サーダナ・マーラー』は、その代表的な存在である。この文献には312種の成就法が収められ、仏、菩薩、女尊、守護尊、護法尊など多岐にわたる尊格がその実践の対象となっている。『サーダナ・マーラー』に収められている各成就法は、作者も年代もさまざま、比較的初期の密教のものから、インド密教の最後期の作者によるもの、さらにおそらくネパールで著述されたものなども含まれる。

『サーダナ・マーラー』はインドの密教美術研究で名高いB. バッタチャリヤによって、サンスクリット・テキストが校訂・出版された (Bhattacharyya 1968a)。さらに彼は『ニシュパンナヨーガーヴァリー』というマンダラに関する文献の校訂も行い、主に両文献をもとに、The Indian Buddhist Iconography を著した (1968b)。二つの文献に含まれる諸尊の図像学的情報をもとに、持物、身色、臂数、面数などを整理し、必要に応じて各テキストの翻訳も行っている。同書はながく密教図像学の基本文献としての位置を占め、インドのみならずチベットやネパール、さらには東南アジアや日本の密教美術研究の重要なツールとなった。

同書がこの分野で重要な役割を果たしたことは事実であるが、著者の Bhattacharyya 自身は『サーダナ・マーラー』と『ニシュパンナヨーガーヴァリー』をあくまでも図像学の文献としてとらえ、実践に関する情報にはほとんど注意を払っていないことも認めなければならない。『サーダナ・マーラー』は工匠や画匠のマニュアルではなく、あくまでも成就法という実践を行うための指南書であり、もう一方の『ニシュパンナヨーガーヴァリー』もマンダラ観想のための文献であったことは、各テキストの内容を見れば明らかである。

『サーダナ・マーラー』の実践に関する情報にはやくから注目したのはトゥッチである。先述の『マンダラの理論と実践』の中で、彼はいくつかの成就法を取り上げ、その中に現れる「サマヤサットヴァ」と「ジュニャーナサットヴァ」というふたつの用語に関心を寄せている。サマヤサットヴァ（誓約の存在）とは実践を行う行者が自分自身の中に作り出す「仮のイメージ」であり、瞑想の対象である尊格の姿を写し取ったものである。もう一方のジュニャーナサットヴァとは尊格の本質的なイメージで、「知恵の存在」を意味する。行者はこのジュニャーナサットヴァを導き、自己の方へ引き寄せ、サマヤサットヴァに重ね合わせてひとつのものとする。これが成就法の基本的なプロセスとされる。

トゥッチ以降、このふたつの存在を軸に、多くの研究者が成就法の研究を進めた。特定の成就法を取り上げ、その構造を示し、その中でふたつの存在がどのような機能を果たすかに注目した。清水 (1981、1992)、立川 (1986)、奥山 (1992) などがそれぞれ考察を行っている。筆者自身も拙稿を發表したことがある (1992a)。ただし、いずれもインド学や仏教学の立場からの考察で、美術や造型との関係についての関心は希薄である。

美術史の分野からの唯一の成果は肥塚 (1967) である。観音菩薩の成就法を取り上げ、造型表現と瞑想の関係を論じている。しかし、論文の大半は『サーダナ・マーラー』の翻訳にあてられ、いくつか斬新な視点は見られるものの試論的なレベルにとどまっている。

成就法文献は『サーダナ・マーラー』以外にも数多く残されている。その中には未校訂のサンスクリット写本で伝わるものや、チベット語に翻訳されたものもある。密教の尊格の図像や実践に関する豊富な情報が依然として手つかずのまま残されているのである。

またこれらのインドの資料や、あるいは口伝をもとに、チベットにおいてもおびただしい数の成就法文献が新たに生み出された。すでに出版されているものもあるが（たとえば

Lokesh Chandra 1974; Taranatha 1974, 1976)、全体から見ればごく一部でしかない。チベットの場合、これらの成就法文献を参照して、絵画や彫刻が制作された。たとえば、数百の尊像を同一の規格で描いた「尊像集」は、このような成就法文献にもとづいて制作されたことが明記されている（たとえば Lokesh Chandra 1986; Tachikawa et al 1995）。インドにおいては成就法文献が尊像作成の手引きになることはなかったが、チベットでは実践と美術をつなぐ媒体として文献が重要な位置を占めることになったのである。チベットにおける成就法文献と図像集などの美術作品との研究も、宗教実践と美術に関して重要な寄与をなすであろう。

4. チベットの絵画

チベットの仏教絵画は礼拝のための宗教美術である。しかし、その形式は単独の尊格を描いた尊像図ばかりではなく、仏伝や前生活を表した説話図や、転生ラマや血脈の相承者たちを描いた歴代の高僧図、十六羅漢や三十五仏を描いた集合図などヴァラエティに富む。インド密教から受け継いだマンダラも、チベット仏教絵画の主要なジャンルのひとつであるし、釈迦や自派の開祖を中心に数多くの尊格や高僧を樹木の上に配した、集会樹と呼ばれる独特の形式の作品もある。

チベットの仏教美術に関する関心は、わが国でも近年、急速に高まってきているが、多くの人々が、彫刻に比べ絵画に対して、より難解なものという印象をいだいている。これはチベットの絵画の持つこのような形式上の多様さによるものであろう。単独の礼拝像が大半を占める彫刻であれば、たとえ聞き慣れない名称であっても尊名や人名が示されれば、一応その作品が何であるかは理解できる。しかし、絵画の場合、マンダラや集会樹のような独特の形式の作品はともかく、最も一般的な形式である尊像の壁画やタンカであっても、中心となる尊格以外にも、余白に描かれたさまざまな尊格や人物、情景などが何であるのか、そして中心の尊格とどのような関係にあるのかを知らなければ、その作品の主題さえもわからない。

チベットの仏教美術の研究は、欧米では東洋学者の手によって、はくから進められてきた。Getty (1962)、Gordon (1978)、Clark (1965) などはその先駆的な業績で、現在でもなお有益である。しかし、個々の作品の主題や、制作された歴史的背景にまで踏み込んだ美術史的な研究は、ここでもトゥッチの登場を待たなければならない。チベットやネパールへの豊富な探検歴をほこるトゥッチは、現地で収集した図像作品のうち、タンカと呼ばれる絵画の作品に対して詳細な研究を行った。Tibetan Painted Scrolls (1949) がその成果で、百点以上の図版を取めた大型の豪華本として出版された。チベット仏教絵画の全般にわたる記念碑的著作である。

チベット美術の図版集については内外ともに膨大な出版物があり、枚挙にいとまがない。ラダック地方の寺院と壁画についてはすでに述べたとおりである。

近年発表された Jackson の A History of Tibetan Paintings (1996) は、チベット仏教絵画の通史的研究として重要である。文献に関する豊富な知識を背景に、チベット仏教絵画の

時代区分と主要な流派を明らかにし、それぞれの代表的な作品について綿密な考察を行っている。チベットの絵画研究に新時代を開く重要な研究となるであろう。

チベット美術の展覧会は、欧米諸国を中心に頻繁に行われている。展覧会にあわせて図録も出版されているが、その中でも世界的な規模で巡回し、1997年にわが国でも開催された Sacred Art of Tibet (わが国では「チベット密教美術展」) の図録は、美術史家の M. リーとチベット学者の R. サーマンによる大部なもので、最新の成果をとりいれた充実した内容となっている (Rhie & Thurman 1991)。同じくサーマンが関与した展覧会 Mandala: The Architecture of Enlightenment (Leidy & Thurman 1997) も、やや小規模ながらも、マンダラにテーマをしぼることにより、宗教美術としての特徴や機能がより鮮明になっている。チベットのみならず、インドや日本の関連作品も網羅することで、地域的な広がりも示している。

チベットの仏教絵画の特定の形式の作品については、マンダラを別にすれば必ずしも豊富ではないが、ドライラマとパンチェンラマの歴代タンカに関する Schmidt (1961, 1964) や、同じ著者による八十四成就者図の研究 (1958)、ターラナータの文献による仏伝図に関する奥山他 (1996)、種々の形式の作品を概略的に説明する田中 (1990, 1993) などをあげることができる。筆者自身は集会樹に対して関心を持ち、図像上の形式と集会樹を対象とした礼拝や瞑想などの実践との関係について考察を行った (1999a)。またマンダラがインドからチベットに伝えられ、タンカとして制作される過程で、どのような構造上の変化があったかについて拙稿を発表した (1999b)。

チベットの宗教実践に関する研究で、美術との関わりを有するものをあげておこう。Bentor (1996) は尊像の安置式や聖別式であるプラティシュターに関する研究で、インドとチベットの諸文献からその構造や意味を考察している。Beyer (1978) はチベット仏教で最も人気の高い尊格のひとつターラーを中心に、その信仰形態や礼拝の方法を詳細に明らかにしている。現在のチベット仏教の実践に関する基本的な研究として定評がある。Gyatsho (1979) はチベット人自身による著作であるが、僧院儀礼に関する内容で、マンダラや灌頂についての情報も豊富である。先述の Jackson の手によって翻訳されている。Karmay (1988) は絵入り写本の研究であるが、チベット仏教が伝える黒魔術的な儀式を伝えている。

チベットの土着の宗教で、仏教が伝来する以前から信仰されていたボン教も、壮大な図像と実践の体系を有している。現在残されているボン教は仏教、とくにニンマ派の影響を強く受けていると言われているが、その全容は未だ明らかにされていない。ボン教研究の第一人者である Kvaerne は、その美術にも関心を寄せ、実践との関係も視野に入れて研究を発表している。葬送儀礼を扱った著作 (1985) や、主要な尊格の図版を多数収録する The Bon Religion of Tibet (1995) はその一部である。チベット仏教との比較も興味深いテーマになるであろう。

5. おわりに

以上、インドとチベットの密教の宗教実践と美術に関するこれまでの研究成果を、三点

にしぼって簡単にまとめてみた。はじめに述べたように密教は仏教の中でもとくに儀礼や図像を重視する立場をとる。ここで取り上げた三つのテーマの他にも、寺院建築の構造や象徴性と実践との関わり、絵解きなどを通じた美術作品による教化の問題、実践に用いられる美術作品の視覚上の演出や技巧なども考察の対象となるであろう。しかし、いずれもほとんど研究の蓄積はなく、これからの研究が期待されるテーマである。また美術史や仏教学などの一分野ではなく、広範な領域にまたがった学際的な研究が求められるであろう。

文献（本文で言及した以外のものも含まれる）

- Bentor, Y. 1996 Consecration of Images and Stupas in Indo-Tibetan Tantric Buddhism. Brill's Indological Library, vol. 11, Leiden: Brill.
- Beyer, Stephan 1978(1973) The Cult of Tara. Berkely: University of California Press.
- Bhattacharyya, B. 1968(1958) The Indian Buddhist Iconography Mainly Based on the Sadhanamala and Other Cognate Tantric Texts of Rituals. 2nd ed. Calcutta: K. L. Mukhopadhyay.
- Brauen, M. 1992 Das Mandala: Der Heilige Kreis im Tantrischen Buddhismus. Koln: Du Mont Buchverlag Koln.
- bSod nams rGya mtsho 1983 The Tibetan Mandalas, the Ngor Collection. Tokyo: Kodansha.
- Clark, Walter Eugene 1965(1935) Two Lamaistic Pantheons. New York: Paragon Book Reprint Corp..
- Decleer, Hubert 1978 The Working of Sadhana: Vajrabhairava. In Brauen, M. & Kvaerne, P. (eds.), Tibetan Studies, Zurich, pp. 113-123.
- Getty, A. 1962(1914) The Gods of Northern Buddhism. Rutland: Charles E. Tuttle.
- Goepper, R. & J. Poncar 1996 Alchi: Ladakh's Hidden Buddhist Sanctuary. London: Serindia
- Gordon, A. K. 1978(1914) The Iconography of Tibetan Lamaism. New Delhi: Mushiram Mano-harlal Publishers Pvt. Ltd..
- Gyatso, Thubten Legshay 1979 Gateway to the Temple: Manual of Tibetan Monastic Customs, Art, Building and Celebrations, tr. by D. P. Jackson. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar
- Jackson, David P. 1996 A History of Tibetan Painting. Wien: Verlag der Osterreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Kapstein, Matthew 1994 Weaving the World: The Ritual Art of the Pata in Pala Buddhism and its Legacy in Tibet. History of Religions 34(3): 241-262.
- Karmay, Samten G. 1988 Secret Visions of the Fifth Dalai Lama. London: Serindia Publications.
- Kvaerne, Per 1985 Tibet Bon Religion: A Death Ritual of the Tibetan Bonpos, Iconography of Religions Leiden: Brill.
- Kvaerne, Per 1995 The Bon Religion of Tibet: The Iconography of a Living Tradition. London: Serindia.
- Leidy, D. P. & R. A. F. Thurman 1997 Mandala: The Architecture of Enlightenment. Boston: Shambhala.
- Lessing, F. D. 1942 Yung-Ho-Kung: An Iconography of the Lamaist Cathedral in Peking.

Stockholm.

Lokesh Chandra 1974 *Sadhana-mala of the Panchen Lama bsTan pa'i nyi ma phyogs las rNam rgyal* entitled *Yi dam rgya mtho'i sgrub thabs rin chen 'byung gnas kyi lhan thabs rin 'byung don gsal*, 2 parts. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

Lokesh Chandra 1986 *Buddhist Iconography of Tibet*. Kyoto: Rinsen.

Meisezahl, R. O. 1980 *Geist und Ikonographie des Vajrayana-Buddhismus*. Sankt Augustin: VGH Wissenschaftsverlag.

Olschak, R. C. & G. T. Wangyal 1973 *Mystic Art of Tibet*. New York: McGraw-Hill.

Rhie, M. & R. Thurman 1991 *The Sacred Art of Tibet: Wisdom and Compassion*. London: Thames and Hudson.

Schmid, T. 1958 *The Eighty-five Siddhas*. Stockholm: Statens Etnografiska Museum.

Schmid, T. 1961 *Saviours of Mankind I: Dalai Lamas and Former Incarnations of Avalokiteśvara*. Stockholm: Statens Etnografiska Museum.

Schmid, T. 1964 *Saviours of Mankind II: Panchen Lamas and Former Incarnations of Amitayus*. Stockholm: Statens Etnografiska Museum.

Snellgrove, D. L. & T. Skorupski 1977(vol.1), 1980(vol.2) *The Cultural Heritage of Ladakh*. Warminster: Aris and Phillips.

Tachikawa, M., M. Mori & S. Yamaguchi 1995 *Five Hundred Deities*. Senri Ethnological Reports No. 2. Senri: National Museum of Ethnology.

Taranatha, Jo nan rJe btsun, 1974(vol. 1) 1976(vol. 2) *Yi dam rgya mtho'i sgrub thabs rin chen 'byung gnas: A Collection of Sadhanas for Invoking the Various Tutelary Deities of Lamaism*, 2 vols., New Delhi.

Tucci, G. 1949 *Tibetan Painted Scrolls*. Rome: La Libreria Dello Stato.

Tucci, G. 1949 *Teoria e pratica del mandala*. Roma: casa Editrice Astrolabio.

Vatsyayan, Kapila ed. 1991 *Concepts of Space: Ancient and Modern*. New Delhi: Indira Gandhi National Centre for the Arts.

石田尚豊 1975 『曼荼羅の研究』東京美術。

井上隆雄、頼富本宏、松長有慶 1978 『チベット密教壁画』巖々堂。

岩宮武二(写真)、石黒 淳・頼富本宏(解説) 1987 『ラダック曼荼羅』岩波書店。

氏家昭夫 1974 「ネパールの仏教儀礼の紹介: Gurumandalarcanapuja について」『密教文化』97: 72-96。

奥山直司 1992 「インド後期密教における教理と造型: devata とそのアイコンをめぐる」『日本仏教学会年報』57: 223-236。

奥山直司他 1996 『釈尊絵伝』学習研究社。

小倉 泰 1990 「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性(1): Padmasamhita に於ける寺院建築の過程と儀礼」『東洋文化研究所紀要』111:131-192。

小倉 泰 1991 「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性(2): ヴァーストゥプルシャマンダラと寺院の平面設計」『東洋文化研究所紀要』115:1-64。

加藤敬・松長有慶 1981 『マンダラ』毎日新聞社。

肥塚 隆 1967 「瞑想と造型」『南都仏教』20: 60-79。

- 小西正捷 1985 「インドの「絵とき」芸能：その起源と実態の諸例」『絵解き研究』3: 1-13。
- 桜井宗信 1996 『インド密教儀礼研究：後期インド密教の灌頂次第』法蔵館。
- 清水 乞 1981 「仏教美術における菩薩思想：観想行とその造形化を中心として」『菩薩思想』大東出版社、pp. 507-521。
- 清水 乞 1992 「密教儀礼におけるイメージの重層性」『日本仏教学会年報』57: 237-250。
- 高田 修、秋山光和、柳沢 孝 1967 『高雄曼荼羅』吉川弘文館。
- 立川武蔵 1986 「金剛ターラーの観想法」『論叢仏教美術史』（町田甲一先生古稀記念会編）吉川弘文館、pp. 65-97。
- 立川武蔵 1987 『曼荼羅の神々』ありな書房。
- 立川武蔵 1989 「マンダラー構造と機能」『岩波講座東洋思想第 10 巻インド仏教 3』岩波書店 pp. 289-314。
- 立川武蔵 1990 『女神たちのインド』せりか書房。
- 立川武蔵 1996 『マンダラ：神々の降り立つ超常世界』学習研究社。
- 立川武蔵 1997 『マンダラ瞑想法：密教のフィールドワーク』角川書店。
- 立川武蔵 1998 『マンダラとは何か』高野山大学。
- 立川武蔵編 1993 『曼荼羅と輪廻：その思想と美術』佼成出版社。
- 立川武蔵編 1996 『マンダラ宇宙論』法蔵館。
- 立川武蔵、正木晃編 1997 『チベット仏教図像研究：ペンコルチューデ仏塔』（国立民族学博物館研究報告別冊 第 18 号）。
- 田中公明 1987 『曼荼羅イコノロジー』平河出版社。
- 田中公明 1990 『詳解河口慧海コレクション：チベット・ネパール仏教美術』佼成出版社。
- 田中公明 1993 『チベット密教』春秋社。
- 田中公明 1994 『超密教時輪タントラ』東方出版。
- 田中公明 1996 『インド・チベット曼荼羅の研究』法蔵館。
- 田中公明 1997 『性と死の密教』春秋社。
- 田中公明・吉崎一美 1998 『ネパール仏教』春秋社。
- トゥッチ、G. 1984 『マンダラの理論と実践』 ロルフ・ギーブル訳 平河出版社。
- トゥッチ、G. 1991 『マンダラの理論と実際』 金岡秀友・秋山余思訳 金花舎。
- 梅尾祥雲 1927 『曼荼羅乃研究』高野山大学出版部。
- 藤井恵介 1998 『密教建築空間論』中央公論美術出版。
- フジタ・ヴァンテ編 1994 『チベット生と死の文化：曼荼羅の精神世界』東京美術。
- 松長有慶 1983 『マンダラの世界』講談社。
- 松長有慶 1985 『密教・コスモスとマンダラ』日本放送出版協会。
- 森 雅秀 1992a 「マハーマーヤーの成就法」『密教図像』11: 23-43。
- 森 雅秀 1992b 「観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラ」『日本仏教学会年報』57: 73-90。
- 森 雅秀 1994 「密教儀礼と聖なる空間」『日本仏教学会年報』59: 105-121。
- 森 雅秀 1997a 「ペンコルチューデ仏塔第 5 層の『金剛頂経』所説のマンダラ」『チベット仏教図像研究（国立民族学博物館研究報告別冊 第 18 号）』（立川武蔵・正木晃編）、

pp. 269-318。

森 雅秀 1997b 『マンダラの密教儀礼』春秋社。

森 雅秀 1998 「ツィンマーマン・コレクションの「ヴァジュラーヴァリー四曼荼羅」：チベットにおけるマンダラ伝承の一事例」『美術史』145: 34-81。

森 雅秀 1999a 「集会樹の造型と儀礼」『印度学仏教学研究』47(2): (194)-(201)。

森 雅秀 1999b 「解体されるマンダラ：タンカの画面構成に関する一考察」『アビダルマと仏教文化 加藤純章博士古稀記念論集』春秋社（印刷中）。

頼富本宏 1985 『マンダラの仏たち』東京美術。

頼富本宏 1990 『密教仏の研究』法蔵館。

頼富本宏 1990 『密教とマンダラ：その万華鏡的世界』日本放送出版協会。

頼富本宏 1991 『曼荼羅鑑賞の基礎知識』至文堂。

頼富本宏監修 1997 『西西藏石窟壁画』集英社。